

玉懸博之著

## 『近世日本の歴史思想』

(ベリかん社・二〇〇七年)

### 大隅 和雄

本書の著者は、「はしがき」でつぎのように述べている。

……日本では、古来、歴史観と歴史像の何たるかが、日本民族に結びつけられて特に深く問われ、日本的といつてよい歴史観と歴史像が形成されきたった、といつてよい。

日本思想史学という学問の第一の目標が、日本人ないし日本民族のアイデンティティを明らかにするにある、という点については異論がないであろう。私は右の内容からなる歴史思想の研究こそが、過去から未来にわたる日本歴史の形姿何如をとらえようとする——日本人の営みの総体を長期的視野からとらえようとする——点で、かつ日本人を含めた人間の作りなす歴史そのものの本質を究めようとする——日本人を含む人間の営みをその深みから究めようとする——点で、日本人ないし日本民族のアイデンティティ

の闡明に最も深く寄与すると考える。

日本人の、歴史思想の歴史を明らかにすることは、日本思想史研究の根幹につながる課題であると考える著者は、早く四十年前に、中世の代表的な歴史書『神皇正統記』の歴史観を問う論文を発表したが、その後、歴史思想は著者の中心的な研究課題となり、『日本中世思想史研究』（一九九八年）の後をつぐ本書が刊行された。

本書には、一九六九年の「『読史余論』の歴史観」に始まる、近世前期の歴史思想をめぐる研究成果十一篇が、つぎのような編成で収められている。

はしがき

- 1 慶長期の小瀬甫庵の思想
- 2 『天正記』から『太閤記』へ——近世的歴史観の発生
- 3 林羅山の歴史思想——その日本歴史像をめぐる
- 4 素行歴史思想の核心をなすもの——その神代観をめぐる
- 5 山鹿素行の歴史思想——その歴史的世界と日本歴史の像
- 6 熊沢蕃山の歴史思想
- 7 前期水戸史学の歴史思想の一側面——栗山潜鋒の歴史思想
- 8 前期水戸史学の歴史思想統考——安積澹泊『大日本史』

「論贊」をめぐる

9 『読史余論』の歴史観

10 新井白石——その思想史的営為と基本的思惟様式

〔補論——研究史〕 近世前期の歴史思想——近世武家史学の成立・成熟をめくって

あとがき

ここで近世前期というのは、安土桃山時代から、享保時代までを指しているが、幕藩体制が明確な姿を現し、鎖国の体制が整って行く時代に、歴史思想はどのような展開をみせ、近世思想の成立と、どのような関係をもっていたのかが、明らかにされている。

二

本書の論文は、その対象と論点から、四部に分けることができる。まず第一は、大村由己・太田牛一・小瀬甫庵によって書かれた、信長、秀吉の伝記を手がかりに、近世の歴史思想形成の過程を読み取ろうとした二篇。第二は、近世前期の代表的な思想家、林羅山・山鹿素行・熊沢蕃山の歴史観と歴史像を論じ、その思想的な位置を明らかにしようとした四篇。第三に、『大日本史』を支持している歴史思想を、編纂の初期に中心的な役割を果たした、栗山潜鋒と安積澹泊の業績を通じて明らかにした二篇。そして、第四に、近世の儒教的な歴史思想の頂点をなす新井白石の思想を論じた二篇、そして全体をまとめる研究史の回顧である。以下、その内容を紹介しておきたい。

本書は、近世の歴史の幕を開いた英雄である、織田信長、豊臣秀吉の伝記を取り上げることから始まっている。信長・秀吉の周りには、さまざまな能力を持つ人材が集まっていたが、その中で文筆の才に富む知識人が、身近に仕えた主君の伝記を著し、激動の時代を伝えることになった。儒僧として信長・秀吉、さらに秀頼にも仕え、秀吉の御伽衆の中で、博識広才をもって知られた大村由己は、秀吉の伝記『天正記』を著し、信長・秀吉旗下の武将であった太田牛一は『信長公記』を書き、儒医として秀吉に仕えた小瀬甫庵は、『太閤記』を著した。

本書の著者は、三篇の伝記に現れた歴史思想を検討して、秀吉の天下統一を目の当たりにした大村由己は、天が人間の行為の道徳的善悪に対して下した、賞罰の積み重ねが歴史であると考えていたことを明らかにする。しかし、由己は、天の賞罰のみで、複雑な歴史の過程を説明することは不可能と考え、天とは別に、人間を超えて歴史を動かす力の存在を認め、「運」「無常の理」などで、歴史の動きを説明した。

それに対して、幕藩体制に向かう歴史の動きが、明確に見えるてくる時代に生きた小瀬甫庵は、天意、天理を重視して、人間に禍福を与えるものは、天以外にはありえないと主張し、神仏の力で歴史が動くという中世以来の考えを否定した。その点で、著者は小瀬甫庵を、近世の歴史思想の先駆者であったとするが、その甫庵と由己の中間に立っていた牛一は、天道を、諸神諸仏と緊密な関連を持つものと考え、儒教的な天と、仏天・明神と

を習合することによって、現実の歴史の複雑な動きを説明しようとしたといひ、由己―牛一―甫庵は、近世初頭の歴史思想の流れをよく表していると論じられる。

第二部では、近世前期の代表的な思想家の歴史思想が、明らかにされる。林羅山は、幕府の修史事業を主導したが、編纂物の中に自身の歴史観を書き込むことをしなかった。そのため、羅山自身の歴史思想については、まだ究明されていない問題が多いという。そこで著者は、羅山の神道書『神道伝授』、『本朝神社考』、その他の史論によって、羅山の歴史思想を明らかにして行く。その結果、羅山の歴史像は儒教的な歴史観に依拠しているが、それとは別に、神代が実在したと考えられていたことを重視し、儒教的な歴史思想の受容の問題を、問いなおす必要があると述べられる。

ついで取り上げられる山鹿素行は、朱子学から離脱して、古学に転向した後、『武家事紀』『中朝事實』『山鹿語類』『謫居童問』など多くの史籍を著した。その歴史思想は、従来林家と白石の中間に立つものと見られてきたが、著者は、素行は同時代の歴史学者、歴史思想家と、全く異なる思想の持ち主であったことを強調する。

素行は、羅山の説を受けて、神代の実在を確信し、日本史の根元は神代に定められていてと考えた。天皇は神孫であり、天皇の位は無窮であるという素行の歴史思想が、儒教のそれとは別のものであることは明らかで、日本の歴史を神代と人代に分

け、神代の帝徳に守られた時代につぐ人代は、上古・中古・近代からなり、その歴史は儒教の易姓革命の説によって説明されることになる。

さて、素行と同時代の熊沢蕃山は、陽明学と朱子学を折衷して、独自の学問を開いた。歴史を変化流動する世界と考え、その中で、日本という特殊な国の歴史は、それに相応しい神道と合理的には説明することのできない時勢、さらに人間の力を越えた社会的な力で成り立っていると考えた。朱子学的な歴史観を変容させた蕃山の歴史観は、同時代の学者の間では、特異なものと考えられていたが、近世後期になって多くの人に、大きな影響を及ぼした。

第三部では、水戸学の歴史思想が検討される。日本史上最大の歴史書である『大日本史』が完成したのは、一九〇六年（明治三九）のことであるが、編纂事業が強力に進められたのは近世前期で、栗山潜鋒と安積澹泊が大きな役割を果たした。

『保建大記』という史書を著した潜鋒は、歴史は、普遍的な道をめぐる天と人との交渉によって形作られると考えた。しかし、潜鋒は、始めは儒教的な道徳の普遍性を重視する立場にたっていたが、後には日本の特殊性を強調する立場に傾いて行った。また、『大日本史』の論贊を執筆した安積澹泊も、天は人間に対して、道徳的で普遍的な善悪に応じた応報を与え、人間が、道徳価値を実現することで天に応える過程が歴史であると考えた。しかし、澹泊も、実際に歴史の中で道徳について

考えた時、忠の道德を至上とするようになり、儒教的な歴史観を容れさせることになった。澹泊は、忠の対象となる君主は、道德的修養を積むだけでは不十分で、神化を必要とすると考えたという。

従来、水戸学の歴史観は、近世後期に至って神秘的な傾向を持つようになることとされてきたが、著者は、水戸学の神秘的な歴史観は、後期になって出現するのではなく、前期の潜鋒や澹泊の中に既に潜在していたと指摘している。

さて、第四部の主題となる新井白石は、甫庵から、潜鋒、澹泊までの、儒教的な歴史思想の受容をめぐって、それぞれ個性的な対応を見せた思想家、学者の動きを、集大成する形で登場する。白石は、師の木下順庵の推挙で甲府藩主に仕え、藩主が將軍綱吉の後を継いで、將軍となったため、幕政に参画した。將軍家宣に、武家政治の歴史を講じた『読史余論』、古代史を記述した『古史通』、『古史通或問』、自伝『折たく柴の記』、近世初頭の大名三三七家の系譜を編纂した『藩翰譜』をはじめ、歴史に関わる著作は多い。

白石は、天と人との関係の中で歴史を捉える歴史観を、現実の複雑な歴史の動きを包括的に説明することのできる思想に作り変えた。そのために、歴史を為政者個人の問題でなく、社会的な関係の中で捉える道を開き、「勢」「変」などの観念を取り入れて、歴史の過程を論じた。

### 三

この文の最初に、歴史思想は、日本思想史研究の中心的な主題であるという、「はしがき」の一節を引いた。筆者もその主張に、全く異論はないが、考えてみると、日本思想史研究の中で、歴史思想は、特に重要な分野と考えられてはおらず、研究も活況を呈しているとはいえないのが現状であるように思われる。

その理由は、日本史研究の間で歴史思想というと、「国史」とそれを受け継ぐ正統的な史書、限られた史書を対象にして論じられ、史学史的な論議が繰り返されるが多かったことにあるように思われる。ここでは、思想史の視点に立って、歴史思想の問題を取り上げようとする研究は少なかった。

「国史」は、『史記』『漢書』以下の中国の正史を規範にして編纂された。中国は歴史叙述において、世界に類を見ない伝統を持ち、いくつもの時代を越えて、較べようもない量の文献を有する国であったから、その強い影響下で編纂された国史は、当然の成り行きとして、中国的な歴史観を受け入れて成立することになった。

史学史ではなく、思想史として歴史思想の歴史を明らかにしようとする著者は、まず信長・秀吉の伝記を取り上げて、近世前期の歴史思想を捉えるための、見取り図を提示しようとした。信長・秀吉の伝記の作者たちは、対象となる英雄

の側近くに仕え、同時代人としての広い見聞の中から、新思潮となった儒教的な歴史観に適うものを選び出して、主君の生涯を合理的に説明しようとした。しかし、作者の持つ広汎な知識情報は、歴史観に照らして有効な事項を選ぶのを容易にするとともに、合理的な説明に徹することを妨げることもなかった。

信長・秀吉の伝記に見られる歴史思想と、羅山以下の学者たちが、日本国の歴史の全体を捉えようとして生み出した思想とは、簡単には繋がないものであろう。豊富な見聞をもとに、数十年の生涯を叙述する伝記と、国初以来の歴史を捉えることは、それが成り立つ時間の長さからも、叙述の形の上でも、別のものであった。

著者は、はじめに伝記を取り上げることによって、歴史思想を考える対象を拡大することに成功したといえるが、史学史の枠から出て歴史思想を考えるためには、対象の拡大をもう一步進めて、室町時代に現れる多くの軍記、合戦記などを視野に入れるなどの試みも有効であろうし、その上で、さまざまな書物が伝える歴史と、歴史思想との関係を考える手続きも必要であるように思われる。

さて、史学史的に言えば、近世前期の歴史学は、林家の編纂事業を中心に形成された。近世儒学の基礎を築いた林家の立場は、公的に儒教の歴史観を受容して、日本の歴史を合理的に説明することにあつたから、羅山も、儒教の思想によって、日本の歴史の変転を解釈することを任務と考えていた。

ところが、林家の公的な修史事業とは別に、羅山の歴史思想を考えようとした著者は、羅山が、神代を実在した時代と考えていたことを重視し、さらに素行・蕃山にもその思想が流れていることに注目した。そこで、白石が、神代を人間の歴史として理解できるとしたのは別の、羅山、素行、蕃山などの思想について考えてみると、その背景は奥が深く、簡単に論断できるものではないことが分かってくることになる。

最初の国史の『日本書紀』は、日本にも史書があることを示すために編纂されたが、中国の正史の本紀に倣って記述された神武以後の人皇の歴史以前に、「神代」上下二巻を置いて、日本の歴史の特質を示そうとした。日本史の全体を捉えようとした羅山や素行は、「神代」の記述に回帰したわけで、人皇の歴史が中国の正史に倣う形で書かれ、中国の歴史観に裏打ちされた修辭が鏤められているのを指摘することでは、すまずことのできない問題に行き当たったことになる。

その後も編纂され続けた国史は、編年の実録を目指したが、中国的な歴史観による歴史叙述と、土着の歴史思想を背景にした歴史の記述は、簡単に統合されることはなく、鬩ぎ合ひ、棲み分けの模索を続けて行くことになり、漢文の正統的な歴史と和文、和漢混淆文の物語、軍記、説話などが、棲み分けの道を開いて行くことになった。

羅山に始まる儒学者の立場では、儒教の歴史観に依拠して、日本の歴史を説明することが課題とされたので、説明の容易な

ものを取り上げることから始めて、中国の歴史観を援用して、日本の歴史を論ずる努力が重ねられた。そうした史学史的な視点に立てば、儒教の歴史観で説明できないものは、歴史の域外のことと考えられたといえよう。

羅山は、史籍、史料を渉獵して、修史の事業を進め、水戸家の修史事業では、本格的な史料調査が進められた。しかし、近世前期の学者が、歴史を知ろうとした時、先行の史書による以外の手だては、少ないのが一般であった。つまり人々が持つ歴史像は、先行のいくつもの歴史像の重なり合いの中で形成されたのであったから、その重層的な関係を解き明かして行くことが必要になる。

神代については、多様多様な記述があるというわけではなかったから、「神代紀」に始まって、中世の神道書の神代観、中世日本紀の神代像が重層的に重なって、素行や蕃山の神代像を形作っていることを視野に入れることによって、羅山や素行の思想が見えてくるのではないかと思われる。儒教の歴史観の受容の経過を明らかにするのが、史学史の主題であったとすれば、「神代紀」の記述の理解と継承の経過を明らかにすることは、歴史思想史の主要な主題の一つであると言えよう。

羅山・素行・蕃山の問題だけでなく、著者は、水戸学の中にも、儒学の受容という視点だけでは捉えきれない、思想の流れがあることを指摘している。本書は、歴史思想を取り上げることによって、中国的な思想に対して、日本の立場を主張する思

想の水脈が流れていることを説いているが、それが、歴史思想にとどまらず、日本思想史全体に繋がるという示唆には、大きな意味があると考えられる。

さきに述べたように、本書は日本人の歴史思想を、歴史はいかに書かれてきたか、史書はいかにして編纂されたかという、史学史の問題として解明するのではなく、歴史の本質がいかなるものであるかを考え、歴史をいかなる形姿をもつものと考えていたかを問う、思想史の問題として捉えようとした研究の成果を取めた書である。

歴史思想についての従来の研究史を、綿密に辿り、まだ取り上げられていない問題の在り処と、解明の方法を明らかにした上で、近世前期の思想家たちの狭義の歴史観と歴史像が明らかにされている。重要でありながら、研究の遅れを認めざるを得ないこの分野に寄与するところ大なるものがある。

ただ、新しい問題を提起した研究書の個々の論文が、学術的に慎重な立場を守っているために、もう一步大胆な見通しが示されればと思うのは、筆者のみではあるまい。前者では、「歴史観」に対して、「政治観」が取り上げられているが、近世前期になって、明確な姿を見せるようになる政治との関連で、歴史思想を捉え、中国的な歴史観と、日本中心の歴史観との関わりを論じて、国学の歴史思想の問題への見通しが示されればと願うのは、筆者だけではあるまい。

思想史の視点に立つ、歴史思想研究の広がりや深まりを願う

ものである。

大桑斉・前田一郎編

(東京女子大学名誉教授)

『羅山・貞徳』『儒仏問答』——註解と研究』

(ぺりかん社・二〇〇六年)

三浦 雅彦

—

本書で翻刻された『儒仏問答』は、近世初期の儒者林羅山が問い、貞門俳諧の祖として知られる松永貞徳が答えたこととされる問答の記録である。貞徳は在家ながら熱心な法華信徒で、儒学の立場から仏教を批判する羅山に対し、仏教の立場から応じたものとされる。両者の展開した儒仏論争は近世前期の思想史を考えるうえで重要なもので、特に貞徳の思想は近世における在家の仏教思想として興味深いものである。

本文編の章立ては翻刻にあたって便宜的に分割記載されたもので、各章には内容を表すような章題とともに詳細な註解と、現代語訳に代わる要旨が付され、初学者にも配慮した分かりやすい構成となっている。参考辞典一覧・註典拠一覧・本文索引なども、本書の内容を知るうえで有益なものである。また、凡例によれば、『儒仏問答』本文編は前田一郎氏のほか福島栄寿・平野寿則・武田朋宏の諸氏が分担執筆したことが知られる。